第6回
子どもの「困った行動」をどう捉えるか
～本当に困っているの？それとも注目行動？～

講師　　赤塚　めぐみ　氏

１　これからの生活に必要な力

子どもに身に付けさせたい、これからの生活に必要な力は、自分がその場面でうまくいっているかを判断できる力です。これを自己モニター力と言います。２，３歳ぐらいになると、その年齢なりに自分の行動を瞬時に振り返る力を持っていて、うまくいかなかったらどうやり直したらいいかを、自分で組み立てる力が徐々に付いていきます。４，５歳～1年生に向けて、意識的にモニターできるような力が育っていくと、集団生活の中で自分をコントロールすることが上手になっていきます。

加えて、うまくいかないことに気づいたときに、困っていることを相手に受け止めてもらえるように表す力も必要です。うまくいかず、どうしたらよいかわからなくて情緒が不安定になると、乳児期は泣いて表します。３～５歳になると、大人に方向づけをされながら、この方法でやり直ししたいと交渉する力が付いてきて、子ども達はより自発的に生活を開拓していくようになります。

この力は合理的配慮を申請する力に繋がります。乳幼児期は大人が配慮を考えて提供しますが、社会人になると、自分で配慮を申請していくことになります。手助けなしで闇雲に努力するのではなく、適切な手助けを過不足なくする中で、うまく生活できる仕組みを本人が学習していくことが非常に重要です。

２　「合理的」に関するハテナ？

合理的配慮は障害者差別解消法の中で言われており、典型的な例は眼鏡です。眼鏡は視力の悪い方が見えやすくするために使う道具ですが、地域、園で眼鏡の使用について申請することはありません。眼鏡を使わずよく見るように言ったり、見えないことを責めたりすることもしません。

それは、私達が見えにくい状態や、眼鏡があれば困らずに活動できることを想像できるからです。人が何に困っているのかを理解すると、私達は無理な指示や要求はせず、穏やかな気持ちで接することができます。ところが、発達や愛着に問題のある子に対しては、彼らの世界観がどのようなものなのかあまり知られていません。

また、視力検査をして自分に合う眼鏡を作るように、本来は困っていることに対して、細かい調整が必要なはずにも関わらず、発達障害や愛着障害に関しては、細かい程度の問題は議論にならず、「この子って行動上困っているよね。」「情緒的に不安定だよね。」という大きなくくりで表現されます。そうして大雑把に捉えて接しようとするので、どの程度支援をすればよいか不安になります。度の強い眼鏡はよく見えますが、頭痛等の不調を起こすこともあります。発達障害の子も、度の過ぎた支援をされると不調になります。

一方、極端に度の弱い眼鏡は、かけないよりはいいけれど、あまり役には立ちません。発達障害の子に対して、手のかけすぎはよくないと判断し少しだけ手助けしたとして、本人にとって支援の程度が足りなければ、結局やらないこととあまり変わらないということになります。その支援が役立っているか常に考えなくてはならないのです。

その程度について、発達障害、愛着障害に対しての詳細の検査はほとんどありません。ですので、小さい子であっても「この手助けはどうだった？」と

聞いていくようにしましょう。小さい頃から大人が聞くことで、物事には程度があることに気づいていきます。また、保育者は、どの部分をどの程度調整すれば、関係がうまくいくのかを考えて、関係を築いていくようにするとよいです。

子どもへの聞き方も重要です。視覚障害を例にとると、世の中が真っ暗な方、光は感じる方等、見え方は様々で「見える」認識には人それぞれ違いがあります。ぼんやり形が見えたので「見える」と言ったのに、細かい文字まで読むように指示されたらそこまでは見えなかったということもあるかもしれません。

発達障害の子も、できると思ってやってみたけれど、やってみたらできなかったという体験をしています。多くの子は、保育者に「できる？」と聞かれると「うん。」と頑張ろうとします。大人は意思を確認してやらせたつもりですが、見通しがつく子と、つまずきのある子達の見通しとでは、スタートの時点でギャップがあることを理解しておく必要があります。

また、やり始めたら、自分で決めたのだから最後までやり遂げるように促されます。できると思ったのにできないという混乱の中で「やるの？やらないの？」と保育者に迫られたりすると、ハラハラします。その困った気持ちを泣いて表したり、笑ってごまかしたり、あるいは詰め寄ってくる保育者に敵対心をもったりする子もいます。その場合、次に困った場面ではかなり乱暴な言動で意思表示してくるようになり、また注意されてしまうという負のスパイラルになっていきます。

つまずきのある子ほど、「はっきりわかる、できる」という経験が少ないので、「ここまでできたね。」「ここがわからなかった？」と具体的な段差の部分を一緒に見つけてあげると、どこまで手助けがあったら自分でできるということが少しずつわかってきます。

３　合理的配慮の「申請と提供」のハテナ？

支援の程度がわかってくると、徐々に、具体的に誰にでも伝わるような方法で伝えられるようになっていきます。例えば、30 ㎝くらいの近さなら文字が読めると言えば、保育者は、クラス全員に見せた後に手元で見られるようにする等、支援方法を工夫することができます。

一方、子どもと対話をして進めてきたつもりでも、困らせようとしたり注目行動をしたりする背景には、前項の「わかった」という言葉の意味や程度について取り違えがあったかもしれないということを考えます。

また、断るスキルがない子の場合「わかった？」と聞かれ反射的に頷いてしまうことがあります。癇癪を起こしやすい自閉症の子ほど、断るスキルを身に付ける機会に恵まれず、断りたいけれど正当に断る技術がないので、勝手に部屋を出ていく等の回避行動として表れます。

また、活動をやりたいか尋ねて、子どもがやりたくないと断っても、大人は子どもにいろいろな経験をさせたいのでなんとかやる方向へ誘導することがあります。教育的な働きかけではありますが、子どもは結局やらされるということを学ぶので、次回からは正当な意思表示ではなく、その場から逃げる等の不適切な行動で意思表示をしていくのです。

一番難しいのは、頭ではわかっていても叩いてしまう等の、感情のコントロールができない子です。思考と行動と感情がうまく連動していないケースですが、よくないことをしてしまったことがわかるので「どうせ僕が悪い。」と思い込み、大人と穏やかな交渉ができず、場をかき乱すか、逃げ出すという表れになっていきます。

４　子どもの「安心」に関わるハテナ？

そういった子にまず大切にしたいことは、安心

してやりとりできる機会を与えることです。「話を聞くから、あなたの気持ちをまず言ってごらん。」という安心安全が確保されるような場が必要です。

１つ目は、一般的なやり方ではなく、その子のスタンダードを探す・知るということです。人の思考回路は、順序性やプロセスを大事にする思考回路と、目的や結果、処理をすることを得意とする思考回路の２つに大きく分かれます。

自閉症の子には、見通しが立てづらいので予告や手順を伝えてから取り組ませることがあります。ADHD の子は、目的や結果主義なので、あまりプロセスや説明に重きを置きません。順序性が理解できる子は、手洗いの際に並んで待てばいいことがわかりますが、ADHD の子は並んでいることが情報として頭になく、目的を達成しようとするので、友達を押しのけることもあります。「友達が並んでいたら、後ろにつくんだよ。」と目的を整理して伝える、つまり、その子にとって最も受け止めやすい情報を発信することで、育ちやすい道筋ができ、上手く行動できることが増えていきます。それが学習指導要領でいう個別最適な学習になります。

２つ目は、その子と繋がるチャンネルをもつということです。恐竜が好きな子だったら、恐竜に例えて話す等、その子が受け止めやすい表現に切り替え、信頼関係を築きます。

３つ目は、夢中になれるような時間を増やしていくことです。わくわく感を育てていくと人の話に耳を傾けられる子に育っていきます。その際、わからない、できないという感覚は誰にとっても不安なことですので、その部分を支援しながら、安定的に関わっていくことが大切です。

５　ちょっとした支援のレパートリーを増やす

指示が伴う活動では、指示を繰り返すことでわかる子や、繰り返し聞いてもわからない子、絵や文字で示すとわかる子、絵や文字の種類や並べ方の工夫が必要な子、ペープサートを実際に動かしながらだとわかる子もいます。

また、「あなたに当てます。」とプレッシャーをかけると余計に緊張してわからなくなることもあります。「当てないから考えてごらん。」「友達がやっているのを見るだけでもいいよ。」等、直面化を避けることで安心して参加しようとする子もいます。支援をその子に合わせて組み合わせることで、合理的な配慮に近づけられ、より効果が発揮されます。

６　【事例】友達へのちょっかいを出す子

困った行動、注目行動として、友達に対するちょっかいが止められない子がいます。友達の嫌がることをわざとして嬉しそうに眺めている、友達が嫌がっていることを伝えても繰り返す等の姿があります。つまずきとして考えられるのは、表情認知の弱さ、感情の理解が未熟であること、対人スキルの弱さ、そして想像力の弱さです。

①　基本の支援

まずは、友達の気持ちを保育者が言語化することで、見えない情報、心の動きに気付かせます。次に本人の気持ちの言語化を行い、友達と関わりたい気持ちを尊重し、コミュニケーション意欲を認めたうえで、ちょっかいを出した理由と行動の不一致に気づかせます。友達が嫌がるやり方だから受け入れてもらえないことを伝え「そういうときは貸してって言えばいいんだよ。」と望ましい行動を伝えます。

②　基本の支援を通してアセスメント

気持ちを言語化することで、相手の感じ方や考え方がわかったか、子どもが自分の気持ちを振り返ることができたか、支援が発達段階にフィットしているかを確認していきます。保育者はその子が心の理論をわかっているか見極めることが大切になります。

望ましい行動を実行させる中で、本人が悪いのではなく、とった行動が悪かったということ、行動を変えると結果が変わる、行動には選択肢があるということを丁寧に伝えていきます。

③ 基本の支援にプラスワン

自分の行いを振り返るときには、感情がニュートラルな状態で考える機会をもつことが大切です。トラブルに直面しているときは考える余裕がありません。子どもは、保育者に叱られるかもしれないという思いから、余計に混乱したり、保育者との人間関係が崩れていくかもしれないという不安をもったりしています。

時間や場所を変え、落ち着いた状態で振り返ることで、気づきが得られると思います。それでもなお、思い出して怒りがわいてくる場合は、好きなキャラクターに見立てて「ピカチュウとアンパンマンがけんかしているけど、どうしたらいいと思う？」等、間接的に振り返ると思考が整理されていくことがあります。

その他、行動と結果を客観視させるときに、経過を絵にして見せ、理解を促す方法もあります。

最も大事な支援は、よい情報のフィードバックです。色々トラブルはあるけれど、楽しい時間ももてたこと、うまく振る舞えている場面があることに本人が気づいていけるよう、よい情報を意識的に伝えていきます。

④ 支援をプラスワンするときの観点

観点としては、発達特性、環境因子として人的環境を整備することや保育室の配置や動線の工夫の観点等はよく言われます。

個人因子として、好きなこと、キャラクターに関連づけたりすると、動機づけしやすかったり、自分のことの直面化を避け、イメージができやすかったりします。子どもとチャンネルを合わせていくことで、わかり合うことに繋がっていきます。

⑤ 階層性モデルで支援の仕組みを

学習支援の階層性モデルでは、第１層が通常の働きかけで行動できる子、第２層が補足的な支援が必要な子、第３層は個別的で高密度な支援を必要とする子の３つの層に分けて考えます。

愛着の問題のある子の中には、普段は１層にいるけれど、何かのきっかけで時々大きなパニックがあるとか、突然先生の話が行き届かなくなる等、第３層に跳ね上がってしまうケースがあります。このように子ども達は３層構造の中を分子のように行き来しているので、この場面では第１層だけど、この場面では第２層というように整理できていくとわかりやすいです。

保育者も階層性モデルで考えることができます。通常第１層では、日々スキルアップしながら仕事に取り組んでいくのですが、手がかかる子がいたり、保護者と揉めてしまったりすることがあります。そのとき、第２層の中で、保育者間のピアサポートの体制が速やかに作れる職場だと、助け合いながら踏ん張っていくことができますが、欠けていると、第３層で休職・離職となってしまったり、より手厚い支援が必要となったりしていきます。１，２層で支え合う仕組みを作ることが、困った行動を起こす子どもと付き合う上でも重要だと考えます。

最後に、自分から配慮を適切に求められるような思考行動を身に付けていけるよう、子どもを育てていく必要があります。手伝ってほしいという発信はまず受け止めていくこと、そしてフィードバックするときに、手伝ったからできたのではなく、君が努力をしたから今の生活がよくなったのだということを伝えていってもらいたいです。子ども自身が、自分の努力を振り返られるように背中を押していただくと、はつらつと生活していけると思います。

第６回 焼津市保育者資質向上研修会（抜粋）
令和５年１１月１７日（金）
会場：焼津市役所　大会議室１Ｂ